

# 經濟論叢

第八十六卷 第四號

---

- ブルック・ファーム……………穂積文雄 1
- 社会主義国における国際価値論……………鈴木重靖 16
- 対外関係よりみた元明兩朝の比較……………伊藤幸一 33
- シェンペーターの景気変動理論……………永友育雄 43
- 

昭和三十五年十月

京都大學經濟學會

## ブルック・ファーム

穂積文雄

### 三

われわれはブルック・ファームの構想を、まず、その主唱者リプレイにもとめた。そして、それを、かれがエマースンによせた手紙の一つにおいて得た。われわれは、それにおいて、ブルック・ファームの基本的構想を、よくうかがうことができる。そのことにうたがいはない。しかしながら、およそ、手紙というものは、もと、ある特定のひととひとの間における意思疏通の手段である。それが普通である。しかるに、ある特定のひととひとの間における意思疏通はその手紙にのみよるとはかぎらぬ。そのほかに、かれらの意思を疏通するものがあることをさまたげない。いな、それがあることが、むしろ、多くの場合である。そうかんがえてよからう。それは会談のこともあろう。別の手紙のこともあろう。伝言のこともあろう。あるいは、また、ひとびとのあつまりにおける談論のこともあろう。そのいづれであつてもよい。それは、とうとこでない。いづれにしても、その場合、その手紙は、それを書くひとが、そのことを意識するといなとにかかわらず、そのことを前提とし、その前提の下に書かれる。それは、いなみがたいところとせねばならないであらう。そうすると、その手紙は、そのような意思疏通過程にお

る一部にすぎぬということにならねばならない。したがって、その理解は、そのような過程の理解を要求する。そういわねばならないことになる。ということは、その手紙の理解は、ただその手紙だけでは充分とはいえないということを意味する。その理解を欠く当事者以外の一般人は、それを読んでも、ひとつはなしの一部をきくようなものである、といえよう。そして、そのことは、いま、われわれが問題とするリブレイの手紙についても、いえないわけではない。げんに、その冒頭に「カンカルドでのわれわれの会談で、わたくしが設立したいとおもっているアッソシエーションの理念をあなたが完全に理解されたようには、どうも、かんがえられませんか。」<sup>1)</sup>といっている。そのエマーソンは、一八四〇年二月二日、カンカルドよりその兄弟のウイリアム・エマーソン (William Emerson) に、ブルック・ファームのことについて、手紙を書いているが、かれは、その中で、リブレイの購入せんとしている土地はロックスベリー・スプリングストリート (Spring, St. Roxbury) <sup>ワ、一、二〇〇</sup>エーカー、代価一二、〇〇〇ドルであるとか、小屋の建築が一二、〇〇〇ドルとか、リブレイが開拓者たちとともに翌年四月一日にそこに引きうつるつもりでいるとか、いうことをつたえている。そして、それらのことは、右のリブレイの手紙にはみられぬところである。

そればかりではない。リブレイの構想は、あくまで、リブレイの構想である。そのことは、それが主唱者の構想であることを意味する。そして、一方からみれば、そのことは、それを、もつとも信頼するに足るものとするであろう。それはみとめなければならぬ。だが、他方からみれば、そのことは、それを主観的なものとする傾向がないとはいえない。そして、そのような場合、そこに、希望的観測がしのびこむ余地がないとは、断言のかぎりではない。そうでなくてさえ、ことごとく、ざしとたがうは、世の常のことである。いはんや、希望的観測の存する場合

において、その公算はさらに大なるものがあつても、ふしぎではない、といわなければならぬであらう。かくて、とくに、このような場合、いわゆる試行錯誤がまぬがたいところとなるわけであらう。そうになると、構想は一つのことである。構想の実現は他のことである。そして、構想がそのまま実現しない場合には、それは変容する。すると、最初の構想はかならずしも構想とはいえないことになる。その場合、それは、真の構想の生成過程の一段階にすぎない。真の構想の一資料にすぎない。そういうことにならう。ところで、ブルック・ノームにおいても、試行錯誤をまぬがれなかつた。というよりも、試行錯誤の連続であつた。そういつても、はなはだしいいすぎではなからう。それは後の推移がしめすところである。

こうみてくると、ブルック・ファームの構想をあきらかにするためには、右のリブレイの手紙だけで満足するわけには、ゆかぬことになる。一般人を対象としてかたられたものが必要となる。第三者のとらえた、客観的なものも重要となる。そこで、われわれは、すすんで、そのようなものをもとめなければならぬ。そして、われわれは、それをもとめて、すくなくとも、二つのものを得る。わたくしはつぎにそれらをかかげるであらう。

その一つは、一八四二年五月の「マンズリー・ミセラニー・オブ・リリジョン・ソンド・レターズ」(*The Monthly Miscellany of Religion and Letters*) に掲載された「ジョージ・リブレイ師」(“Rev. George Ripley”)と題する一文の中にみいだされるものである。それはつぎのごとくである。

かれの将来のプランは、わかい男女の教育に關聯をもつ。かれの直接の目的は、われわれの理解するところによれば、實際教育を目的とする一つの協同組合のあつまり (a gathering of cooperation of association) である。われわれは、空想的なもの、または、トランセンデンタルなものは、なにもみいだすことはできない。それどころか、それは、われわれには、實際的であり、

かゝる実行である (both practical and practicable) ともおられる。それは、わかいひとたちには、身心の発達に諸利点を結合し、としのいったひとたちには、精神的教養と健康上・経済上の習性の諸利点を結合しようとする。そして、それを、その目的に、とくに、好適とかんがえられるような社会諸関係の下において、おこなおうという。各人の資産の一部を結合することによって、多数の個人が、個別的に得る以上の改善と享樂の便宜を得るであろう。しかも、個人の趣味や家族的結合の尊重に考慮がはらわれる。哲學的見解や神学的見解をことにするひとびとが、このくわだてにおいて結合することは、派閥の存在をゆるさぬものであり、党派的だという汚名を受ける余地を、けつして、のこさない。

かく、ブルック・ファームについて弁じたる後、同論文はさらに、『「ニュー・イングランド・ファーマー (New England Farmer)」』の論文からの一、二句は、このインスチテューションの性質を、いつそう、あきらかに、しめすであらう」として、つぎのごとく引用する。

この市 (ボストン—訳者註)、および、その近郊の教名の紳士たちによつて、一の「農業・教育の實際的制度」 (Practical Institute of Agriculture and Education) が形成せられた。このインスチテューションの企画は、神学・法学・医学などの専門的職業 (learned profession) の道をすまふものとしなひひとびとに、自由な教育の道をひらくにある。生活の実技 (the practical arts of life) の根底にふたなる科学の諸原理を主とし、語学の研究を従とする。その目的とするところは、科学的農業の研究とその實際的作業を結合すること、現代農業におけるもろもろの偉大な改善を實驗によつて例証すること、職業の神聖と農業に必要な知識・能力をしめして、農夫の土地の耕作への愛着を増大し、よつて、農業を一生のしごととしようとすることとすわかいひとびとに、かれらの職務を理的に遂行する準備をしてやること (prepare...for the intelligent discharge of the duties of their calling) にもあつた。このインスチテューションには、古典學習の部門も附設され、そのほか、学生は、ニュー・

イングランドの諸大学への入学準備教育を受け、または、アンダー・グラデュエーツと同様のコースを履習し、同時に、また、農業の基礎をなす諸学科を研究し、すぎなだけ、その實際をきわめる機会にめぐまれる、ともきいている。

いま一つは、一八四二年一月、エリザベス・パーマー・ピーボディ(Elizabeth Palmer Peabody)が、トランセンドンタリストの機関誌「ダイヤル」(*The Dial*)に寄せた、「ウエスト・ロックスベリー共同体の計画」(“Plan of the West Roxbury Community”)という、一文の中にみいだされるものである。ピーボディ女史(一八〇四—九四)は有名な女流トランセンドンタリストで、教育家・闊秀作家として令名あり、また、書店・出版業の経営でも知られていた。多くの思想家を知友にもち、リプレイ夫妻とも、もとより、親交があった。それに、かの女の末妹ソフィヤ(Sophia Peabody)はナサニエル・ホーンン(Nathaniel Hawthorne)の夫人となつたひとである。そんなわけで、かの女はブルック・ファームへも出入している。ブルック・ファームについては充分以上の理解があるといつてよい。しかも、かの女は、この文中において、一箇の局外者として、これをしたためるといつている。もつとも、そうはいつても、かの女が、ブルック・ファームの企画に普通以上のふかい厚意をよせていることはおえないところである。しかし、それにしても、これは、ブルック・ファームの計画を一般人に紹介する目的の下に執筆されたものであり、詳細をきわめたものである。その上、それは、同時代人の手になるものである。それだけに、それは、まことに貴重な資料たるを失はぬ、といつてよいとおもう。だから、長きをいとわず、引用することにする。

ダイヤルの前号に、キリストの社会理念概見(“A Glimpse of Christ's Idea of Society”)とて、おそらく野心的ともおもわれる標題の下に、若干の記事がのせられたが、それへの附記に、本号に、またなま、えもなく、また、はつきりと存在しても



労働は肉体的たる<sup>と</sup>知的たる<sup>と</sup>をとわず、すべて同一賃率で支払われるものとする。それは、つぎの原理にもとづく。労働が、ただ、肉体的だけとなれば、それに時間をさくことは、個々の労働者にとって、より大きな犠牲となる。なんとなれば、無知であればあるほど、それだけ、教養(cultivation for intellect)のための時間がほしいからである。さらに、知的労働は、それ自身の中に、より高い快楽をふくみ、それ自身の報酬が肉体的労働よりも大である。

あらゆる種類の労働におなじ貨幣価値を設定するいま一つの理由は、労働は共同の利益のためにおこなわれるときは、すべて、神聖である、という偉大な真理を公表するためである。聖人と哲人は、すでに、これをする。しかしながら、小人の世界はしらない。そこで、周囲の世界の道徳的影響の圏外にいない、コミュニティーのわかいもの<sup>のため</sup>に、労働を平等化する決定的な方法をとらねばならないのである。コミュニティーの成員はみな社会的に平等であり、コミュニティーは、その内部において、社会的平等に反することがおこなわれないことをのぞむ(Community will have nothing to be done within its precincts, but what is done by its members, who stand all in social equality)。それは、「子供たちが、サーヴィスの中で、愛情と好意から得られるもの<sup>と</sup>、それをなすひとの義務から得られるもの<sup>と</sup>を差別することを知らず」(to learn to expect one kind of service from Love and Good-will, and another from the obligation of others to render it) ことなからしめんがためである。——それは普通の社会における悲哀であって、共同社会の母親のひとりによって、すなおなたま<sup>しい</sup>、をききつけるもの(destructive of the soul's simplicity)といわれたものである。

したがって、一般教育(Universal Education)は、人世の娯楽ならびに優雅(エレガンス)に必要なあらゆる作業をふくむものであろうから、組合員は、いずれも、たとい、かれがみぞほり人であるうとも、それにおいて、わかいメンバーの教師となるであろう。また、この肉体的労働の昂揚がコミュニティー内における礼法(よそよそし)や洗練(リファインメント)の調子を低下させることにはならないであろう。「ひかりの子」(The "children of light")には、かれらなみの分別が、まったくないことはない(are not altogether unwise in



their generation)。かれらには、ひとつの、目にみえぬ、万能の、本然という護衛者 (guard of principle) がある。洗練にたえぬひとびと (minds incapable of refinement) は、このアッソシエーションに魅力を感じてはじめてくることはないであろう。それは、ひとつの、コミュニティーである。理想の上から傾倒するひとびと (the ideally inclined) にとつてのみ、それは魅力があるであろう。しかしながら、そのようなひとびとは、人世のあらゆる階層の中に、ひとつの目につかぬいたるところに、存在するであろう。(these are to be found in every rank of life, under every shadow of circumstances)。み、そのなかのみぞ、ほり、人の中にすら、宗教の感化によって、高いところから、おだやかだ (in mere superiority)。みかけだけ洗練されたひとびとや、論語読みの論語知らず (the book-learned) を、みくだすことのできるものが、いるはずである。

さらに、このコミュニティーに入れば、たれも、ただ肉休労働のみに終始しはしない。アッソシエーションのための労働の間は、一般のとりきめで、限度がきめられており、その上、各個人の意思によって、短縮することもできる。そして、洗練・向上のため、教養・社交の道が、すべてのひとに、ひらかれている。コミュニティーからかえされた時間は、また、教養のために、つかってはならないで、精神財の作出につかうことになっている。このコミュニティーは、富裕を目的とするが、その富裕は、富を表現する貨幣ではなくて、貨幣の表現する富それ自身、すなわち、「精神生活をいとむための間暇である。」コミュニティーは一つのコミュニティーとして、農業労働の生産物について、一般外界ととりひきをする。そして、家庭に収容することができるかぎり、多くのわかいひとびとに教育を売り、その子供たちとの共同生活に入る。コミュニティーは、最後には、あらゆる必需品だけでなく、あらゆる肉体、および、精神の健康にとつてのぞましいもの、すなわち、書物・機具・標本 (collections for science)・美術品・楽器等類 (means of beautiful amusement) を供給することができるようになりたいと希望している。これらのものは、すべてのひとの共有物である。かくて、私有的念をかきたてずにはおかないものは、もはや、欲望の対象とはならないことになる。そして、やもしてごころ (Sordid passion) は、あらわれることに、その露骨な我欲を露呈することになる。

う。コンミュニチーがその窮極の成功をおさめたあかつきには、コンミュニチーは我欲のもとむるすべての目的を實現して、しかも、精神的な祝福に浴する。そして、それは偉大な精神のみが熱望することをおゆるされるところのものである。

そして、各個人に要請されている資格は、このことを永世不易の条理とすべからう。善心は、つねに、このひとびとに、なくてはならないもの、といつてよい。各人はコンミュニチーのために適度の労働をしなければならぬ。そうしなければ、コンミュニチーの恩恵にあずかつてはならない。だから、メンバーをきめるのは、この機、構の原理であつて、その将来のみこみではない。この原理は、競争や採算ではなくて、世帯における協同であり、男女各人の中に完全な人道精神が存するという信念の各人による自己展開である。前者は人間愛の人世への行使であり、後者は神の愛の人世への行使である。現在の社会で満足しており、その正義感覚がその社会の一般の行為・諸制度・商業精神によつてきつづけられないようなひととは、みな、このコンミュニチーとは、なんらかかわりあひはない。じぶんが肉体労働からまぬがれるために、このんで他のひとびと（そのひとびとは救済のためにかれ以上に、ときを必要とする）の最上のと、きとち、からを肉体労働に投ぜしめるひと、また、みな、このコンミュニチーとは、なんらかかわりあひがない。社会が、いかに、その愛護・教化に従事する成員に負うかを、社会を構成する各個人の必要によつて測定しないひととは、みな、このあたらしい社会に用がない。なんらかの対価をあたえないで、なから得ることをおのむものは、みな、永遠に、このコンミュニチーのそとにとどまるであらう。

しかしながら、コンミュニチーの原理に一身をささげるひとは、みな、そのくびきやすく、その荷はかるいことをしるであらう。キリストがかれの王国についてかたつたことは、すべて、このコンミュニチーについても、ある程度、いうことができる。そして、それゆゑ、それは、ある程度、キリストの理念を具現すると信ぜられる。なんとすれば、そのはいる門はせまい（マタイ伝七章一四一訳者註）。それは文字どおり「畑にかくれたる」（マタイ伝一三章四一四一訳者註）真珠（a pearl hidden in a heap）である。そのために、よろこんで、そのいのちをうしなうもののみが、それをみつけるであらう。そのこゑは、わか

のを、かなしみつつ去らしめたことである。「往きて汝の所有を売りて貧しきものに施せ、(さらば財宝を天に得ん―訳者補足。)かつ、きたりて、われに、従へ」(マタイ伝一九章二二、ルカ伝一八章二二―訳者註)。「まづ神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」(マタイ伝六章三三―訳者註)。

勞働に關するこの原理は、道徳・宗教生活の根柢によこたわっている。けだし、「かねは万惡の根源」というよりも、「勞働は万善の萌芽」という方が、より真実であるからである。

すべてのしごと、は季節ごとに提議され、コミュニニチーのメンバーの自由選択にまかされることになっている。そして、たれも選択しないし、ごには、ひとがやとわれる。だが、コミュニニチーの内において、げんに、できるしごとを、ほおっておいて、そのためにひとをやとうことは、かんがえられていない。雇川勞働をさけることが非常にのぞましい。それで、すべてのしごと、は自発的な犠牲によつても、白日におこなわれるものと、信ぜられている。

はじめにあたって、なんらかの例外があるとすれば、それは、でかけたいと熱望するひとを、みんな受け入れるのに資財が足らないからである。かれらは、避難所がなければ、でかけることができない。そして、この天候では、家を建てぬかぎり、避難所をもつことはできない。そして、かねがなければ、家を建てることはできない。ここは、土地や森に所有者のない、ロビンソン・クルソーの島でもなければ、また、西部の平原や岩山でもない。マサチューセツンの中では、野蛮なインディアン、またはフロリダの合衆国軍隊がするように、徒手空拳で、土地から生活資料をつくり出すに、足るだけのひろさはない。

この、すべてのひとに、その行動部門を選択させる案は、たちまち、指導の天才(Genius of Instruction)を王座につかすことになる。交(ウイユエーブル)は精神生活の生命である。知識は天然の衝動によつて無知の上にふりそそぐ。あらゆる学芸は応答を切望する。「知はさげぢ」(“Wisdom Cries”)。もし男女おのおのが、みな、その愛するところのものを、自然的につたえることができるだけの多くの時間をかけて、教えるとなれば、教育は苦役でなくなる。そして、われわれは、さらにいってよい。

まなぶことは、もはや、ほねおりしごと (骨工) ではない、と。このアソシエーションの多くのメンバーのなだたる素養は、まったく、すぐれた、文学的利点をそなえた学校として、公衆のところに、このアソシエーションに對する関心を、すでに、喚起している。會員の多くは、教育については、多年の實地経験を有し、精通しており、その方法および法則を、教科の性質と教を受ける生徒の条件の中に、みいだそうとしているのに、慣行と無定見より採用せねばならないのを、なげいてきたものである。各教師はその研究乃至日課の復誦の時間を指定する。学者、あるいは、子供の親たち、または、教育委員は、当分の間、教科を選定する。生徒は、教師について教科を履習する間は、教師の節度に服する。

農業は外的生活 (external life) の基盤である。それゆえ、實際とむすびついた科学的農業が、はじめから、指導の主要な部分となる。これは、あきらかに、自然諸科学・数学、および、会計学をふくむ。しかしながら、古典の学習も、また、公平にあつかわれている。少年たちは、ここでは、われわれの大学に入る準備をうけることができる (be fitted our colleges there)。そして、大学の課程をふねことすらできる。おのおのの生徒の特殊研究は、老若男女をとわず、かれらの知能に応じて (according to their inward needs)、厳密に規制されることになっている。子どもたちは、成年に達したのちも、もし、のぞむなら、組合員としてコミュニティーにとどまることができる。だから、こんにち、よくみかけるように、生活費をかせぐことに没頭するということは、ないであろう。それでも、かれらは未成年の間に三・四ドルをかせぐ機会をもつであろう。だから、かれらは、二〇才になると、もし、かれらがのぞむならば、コミュニティーを去って、そのもとで、とひろい教育とをもって、世界の最良の社会のどこにおいても、充分に生活費を得るであろう。計画にこの特質があればこそ、両親たちは、このコミュニティーに加入し、かれらの子どもたちのための大きな個人的蓄積の、ぞみ——かねつくりのために生きるという、よのつねのねがい——を、すべて断念することに、なんらの顧慮をはらわないですむのである。かれらの子どもたちは、一九才まで、食費をとらず、教育も無料で、両親の疾病・死亡の場合は面倒をみてもらうであろう。そして、両親の方も、七〇才をすぎれば、じぶんのためたかねで

くらしでゆけぬときは、コンミュニティーによって、扶助せられるであろう。

かねをもたないでコンミュニティーにはいったものもある。これらのひとびとは、他のいづこにおけるよりも、よりすくない労働で、より充分に、より安楽に、じぶん自身とその家族を扶養することができるであろう。一方、コンミュニティーにとっては、その労働は有益であろう。そう信ぜられる。コンミュニティーは、いかなる意味においても、慈善施設ではない。しかしながら、窮極においては、精神的な資格のあるひとは、みな、うけいれることができることを期待している。

このささやかなオーガニゼーションが、外部の世界から、なんらかのいぢわるい目でみられることがある、ということは、さけられないようにみえる。キリストの王国(キリスト)の諸原理を現世に建設することができる、ということを感じないものは、それを冷笑するであろう。しかしながら、かれらといえども、ともかく、それが無害であるということは、これをみとめざるを得ない。もし、それが、その建設者の希望を実現すれば、それは、ただちに、いくえもの祝福となるであろう。その道徳的なぞよかせ(moral sense)は健康によいはず。それが存続するかぎり、それは、うつくしい兄弟愛のひとつの例であるであろう。もし、その労働が成功して、精神と習俗(mind and manners)の改善、との結合に成功すれば、それは農業に従事するひとびとに、とうとい教訓をたれ、こんにち、野心と、なにか、よりよいもの、さらには、向学心、によって、かきたてられている、いなかより都会への殺到(シキ)の阻止に、なんらかのはたらきをするであろう。多くの青年が農民生活をする。その理由は、そうすることによってのみ、知識人を友人にもったり、知識を得る機会をもったりすることができる、ということである。それでも、かれらは、つぎのことをしるのみである。すなわち、もし、農民生活に知識と節度があり、その労働が、それがまさにあるべきことと、研究と結合されるならば、精神の完成にとっては、職業(プロフェッション)、生活(ライフ)の方が、普通、農民生活よりも、不利である、ということ。このコンミュニティーは、わかい農業家にとっては、ひとつの学校であるであろう。かれらは、ここで、実技だけでなく、かれらのしごと(work)の学理をも習得し、その後、たえず、かれらのしごと(art)を改善することができる。それは、また、最良の師範学校(normal

school) となるであらう。そして、それは、師範学校としては、われわれの公立小学校制度 (common school system) におよび、その素質のわるい教師たちの非能率をなげくひとびとの関心を、要求してもよい。

また、つぎのことも、しっておかねばならない。それは、コミュニチーの各人がおこなうしごとをおわっても、かれらは、なお、余暇をもつ、そして、その余暇において、周囲の世界と交渉をもつことができる、ということである。まったく授業をしないひともある。これらのひとびとは、もし、したければ、とくに、書物を執筆し、芸術に精進して、報酬を得てもよい。また、ひととしての、いろいろのいとなみを、してもよい。こんにち僧侶のちからをおとしているわすらいやいとわしや (the odium of the burthen) というものないキリストの説教者が、このコミュニチーから出てくることもあらう。そして、もし、このコミュニチーから牧師が出て、報酬のために、こんにちのようなコングレーションのなかまにはいることがあるとしても、その場合でも、いつでもかえるところがあるということとは、こんにち腐敗した関係の原因であるコングレーションへの実質上の依存から、かれらをすくうものである。われわれの周囲のおとろえつつある教会のなかにも、牧師と民衆の、さらには、教えるものと教えられるものとの、むかしながらの、ほんとうの関係の、うつくしい事例がある。それはうたがないところである。しかしながら、慈悲がそれを消してしまふことを禁ずるがゆえに、たくさんのレストランが、いまなお、燭台——それは、もはや、金製や銀製ではない——で、かすかなひかりをはなっている、という、うとましい、事実を、かくそうとくわだてても、それは、むだである。しかしながら、霊スピリットをして、ふたたび「好むところ」ホムところに「ふかしめよ」(ヨハネ伝三章八—訳者註)。給与ギフツや他の物フィニッシュ品によつてしぼられしむることなかれ——しからば説かれたることは、(the Preached word) は、それみずからのころも、であるいかめしい威厳を、回復するであらう。そして、それは、たといみづきとり (publicans) やみづきと (sinners) と同席するとも、ふたたび、「学者らのごとくならず權威あるもののごとく」(マタイ伝七章一九—訳者註) とくであらう。

以上、われわれはブルック・ファームの構想をたづねて、それをつたえる資料を涉獵した。いま、それらを考察

して、その基本的な特質を追求するとき、それはつぎのごとく要約されるであろう。

それは、まづ、(一)知識と労働の結合をめざす。つぎに、それを実現するために、(二)教育と、(三)産業、とくに、農業の経営をおこなう。そして、ここでは、(四)共同労働をおこない、(五)自由競争が否定され、(六)自給自足を原則とし、(七)共同生活をいとなみ、(八)共同食事をする。しかも、(九)各人の自由を尊重し、したがって、(十)私有財産を肯定する。そして、そのはなはだしいことには、それは、財政面において、(十一)株式組織を採用し、(十二)利益が労・資双方に分配される。

そして、こうみてくると、われわれは、それが、フーリエー (François Charles Marie Fourier 1772-1837) のフフランジュ (Phalange) の構想に近似するところ大なるものがあるのを見とめざるを得ないであろう。げんに、ホーンは、その「ブライステール・ロマンス (The Bithedale Romance)」のなかで、「カバーデール (Coverdale) をして、つぎのごとく述懐させている。

協勞 (labor of brotherhood) はフーリエーの予言の若干を、すでに、実現した。わたくしは、ほとんど、そうおもった。<sup>9)</sup>

そして、このことは、当時、フーリエーのフフランジュの思想がアメリカにひろがっていたことをおもおうとせ、リブレの構想が、その影響を受けていたという推定をなりたしめるに足るといつてもよからう。また、このことは、後にみる、ブルック・ファームのフフランジュ化が、当然のことであるとはいはないまでも、あやしむにはあたらぬところとなつてよいであろうことを、示唆するものとなすに足りようか。

- (1) 拙稿ブルック・ファーム、二、註、(9) 経済論叢、第八六卷・第二号、(昭和三五・八)
- (2) *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, edited by Ralph I. Rusk (New York: Columbia, 1939), II, 365.

- ③ “Rev. George Ripley”, *The Monthly Miscellany of Religion and Letters*, May 1841, pp. 293-294 (to be found in *Autobiography of Brook Farm*, edited by Henry W. Sams, University of Chicago, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1958, pp. 16-17).
- ④ “Plan of the West Roxbury Community”, *The Dial*, II, January, 1842, 361-368. (to be found in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, pp. 62-68.)
- ⑤ Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*, The Norton Library, W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1958, p. 84. (未完)